
世界を超越した僕

十月文鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界を超越した僕

【コード】

N9898U

【作者名】

十月文鳥

【あらすじ】

僕が世界を超越したという理由とは。僕の世界は創作のなかにある。

そうさ、僕はここにいるんだ。ここが僕の世界だ、僕が存在する世界なんだ。

「君。君ならわかるだろ？ 僕がここにいることが。」

「何を言ってるの？」?? 僕の彼女が答える。「ちよつと変だよ。」

「変じゃない。ぜんぜん変じゃないんだ。たったいま、僕は超越したんだよ。この世界を完全に熟知し、この手に、この世界を、捉えた。掌握した。だから、そう、僕は超越した。僕は世界を超越したんだ！」

「あんまりそういうこと、ほかでは口にしないほうがいいよ。気が狂っていると思われるから。」

彼女はフローリングの上に開いたファッション雑誌を前屈みになつて覗き込んでいる。ここは僕と彼女、二人のマンションの一室。膝と尻をぺたんと落とした恰好が、僕には彼女らしいと思える。でも昔と違って、肉付きがよくなってきた、気がする。いつまでも童顔で可愛いけど、彼女ももう三十に近い。

「セックスしないか？」

「なによ、突然？」本気にしない彼女はうつむいたまま雑誌から目を離さない。

「そういう気分になつたんだ。君の体を見ていたら、急に君のやわらかい肌を抱きしめたくなつた。」

「いやらしい。」怒気を帯びているが、まんざらでもない。

夏の日。夕暮れ。汗をかきながら抱き合う。しつかりと、ぎゅゅと、抱きしめ合うのが、いい。窓から涼しい風が流れ込む。それがせつない。互いに発するにおいは、とても心地よい。それは二人の相性がとてもいいから。

でも、悲しくなる。君を思うと、悲しくなる。

まだ、悲しみが癒えない。まだ、君の言葉に感奮できない。あの頃のように。

どこに行けばいいか、わからない。どこかに、行かなければならない。と、思っているだけで、何も見えない。道が見えない。

そしていま、僕の中で、消えそうになる思いがある。

「やっぱり僕には君が必要だと思う。」僕は同じことを何度も繰り返す。「僕には、君が、必要だと、思う。」

彼女は僕の隣で横になっている。

「君を思うことで、僕は、僕でいられるんだ。」

「うそ。さつきほかのこと考えていたくせに……。」

「いま、自分を見失いそうなんだ。いや、もうすでに僕は自分を見失っているのかもしれない。あの頃、僕らは輝いていた。きつと誰より、誰よりも、ずっと輝いていた。そう、輝いていた。輝いていたはずなのに??。」

彼女は何も言わない。黙って聞いている。

「忘れていたのかな。僕が、忘れてしまったのかな……。」

「……大丈夫よ。」

「もう一度、君の笑顔が見たい。君の笑い声に、触れていたい。包まれていたい。」

??ねえ、その物語は、何が言いたいの?

彼は、死んだ恋人を想っているんだ。人形を抱き、人形に話しかけている。それだけの話さ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9898u/>

世界を超越した僕

2011年7月18日17時06分発行